



5
5630
1



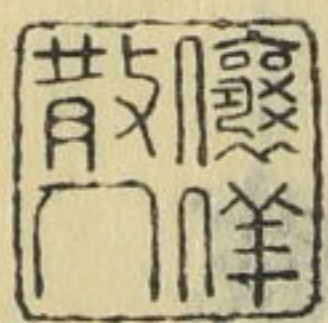
可以詞害其意也。竹內句當玄玄一者，所謂目雖盲，不盲于心，而居常好俳句，其詠四時景象，言人事，喜戚閒適之趣，淡薄之味，往往使人有無限可感者，不為不多矣。纂而輯之，名曰詠物句選。云玄玄一嘗曰：古人之言俳句者不少，而欲尚友其人，則不可不知其意，匪事蹟也。於是乎廼撰有其美名佳句，而事之可以賞者，而遂成編。

名之曰佛家奇人談。其子再按而刺之以繼其父之志，豈不懿哉。苟世之言俳句者，讀之辨，今古之文質，知意趣之雅俗，則有復裨益于風教，亦以為不少矣。古人有言云：誦其詩，讀其書，不知其人，而可乎？是以論其世，是尚友也。玄玄一其有感于此者也乎？是為序。

文化乙亥秋九月既望

いふはるゝに茲又先人玄玄一遺稿あり是能奇哉好む
 者の為小輯すはるゝ八十有餘該楚姑要とるや古人
 此り所成舉てあるを知し又各句に其風韻の變
 を識す小阿り今也四里に題し之を能家奇人強と
 けし後來其種宗幸と濤極摸索此罪哉唱ずんは僕が
 霍澀ゆるり是り志加んや予省文化丙子冬歲
 初春遂に度小筆を採録

懷倅閑人書香



凡例

- 一本文引用する所此出の謂ゆる諸能家集紀夏雜記名類
 類く數る類一云々句といへども其變阿依時の求め
 ばといふ事あり又傳説の正犯を知人も於て此を詳に
 一を載在する者も上文昭あり下あ承に科る古今能
 後八十餘家各自の奇形風韻成志らるゝむ
- 一此出唯筆小隨く年代此次序は拘りず且その傳名
 委曲系依の家く姑世記はゆるり茲に畧に系あり
 風流を考ふとこればかり
- 一文原惟能來山捨女千代は屬を姑閑田が絶する所と能家
 吳あり能まとも室ありり我審り一見んと能せば必らに
 主出と互考すべし

一 江戸に募りて得る変名古画襖短尺虫懐笥等並びて友人
 須吉の筆を借依も亦其れ旨意を解するの一助亦依
 居しや親し人それ諸哉恩

蓬廬青青識



俳家奇人談目次

一 昔々上之巻

一 宗祇法師

一 山崎宗鑑

一 杉田重一

一 松江重頼

一 山本西武

一 安原貞室

一 齋菴徳元

一 荒木田守武

一 松永貞徳

一 野々口左圃

一 高瀬梅盛

一 鶏冠井令徳

一 北村季吟

一 石田未得

附 英津女

附 春泥

附 元次

附 醫水

附 湖春

附 未琢

一 高鳴玄札 附 山夕

一 荒木加友

一 半井卜養 附 慶友

一 池田正式

一 芳賀一品

一 中島貞宜 附 二葉

一 神燈忠知

一 田氏捨子 附 盤桂禪師

一 池西言水

一 西山宗因

一 井原西雀

一 推中才磨 附 團水

一 田中常矩 附 常長

一 田代松意 附 正友

一 菅谷高政

一 伴友信德

一 上島鬼貫

一 園女 附 惟中

一 小西来山 附 由平

中之卷

一 松尾桃青

一 榎中其角

一 服部嵐雪 附 烈女

一 向井玄素

一 僧文草

一 森川許六

一 東華坊

一 曲翠 附 破鏡

一 惟然坊

一 勾空

一 秋之坊 附 李東

一 磨工北枝

一 僧浪化

一 僧千那

一 小川破笠

一 路通

一 梢風尼

一 智月尼 附 乙州

一 鯉屋杉風

一 野坡

一 越智越人

一 涼菴

一 曾良

一 原田宇古

一 知足一家

一 生駒萬子

一 山口素堂

下之卷

一 中川乙由

一 舍羅

一 露川

一 深川湖十

一 高野百里 附 琴風

一 紀文親子

一 秋色

一 櫻井吏登

一 水間沾德

一 菊屋沾涼 附 行尚

一 大沓三子風

一 立羽不角

一 梅路

一 大高子葉

一 加茂原松

一 素岡貞佐

一 松木淡淡

一 堀内仙雀

一 活弁舊室

一 清水超波

- 一 子暹巴人
- 一 横井也有
- 一 千代女
- 一 山口羅人
- 一 建初源佈
- 一 遊女談

通計目次八十有六談

一 玄玄居士略傳 附 今世名家叢句

佛家奇人談卷之三

行憲玄玄一建初男 蓮屋書事 卷行

宗祇法師

宗祇法師松年君比奈里一があ依ひ己年一松く連歌の
 末七代岡ま一又惜いう奈案十年間より蓮奇の村年比
 功を積られた空妙小針里維一と答ふ使いはく松らバ十年
 昼夜勤ふた如何と或人大一何たましく我が及ぶ西又何
 すと感せしとや漢北相如とは十て始く孝經を讀
 唐の高適ハ六十小一と神て詩我作依れば世變が蓮奇
 達き一と亦宜あまほほや衣小伊母の鬼費も是を稱し
 當時雙双ちりりて祀せ玉或時近隣は難産阿里りる使ちその
 屋又信く一摩何般若はらみ女の奇情う奈宗祇一二も海で

さんの綱ごとくと宗長此後一けるが官ち男子をお生せり又
 時名 帝の瘡疾候のせむつるに世史の連奇一七は全性
 むひ一子有り云妙境又入とたのそ奇情と候と少あふは
 生號を種玉唐旬秋といふ何まの年ふり有けむ仲秋三
 五此後一天浮雲か、里月の宴をふるげる哉歎く「云て世の
 月を曇らば今世もあけ句を今世法よく人の備する所有り
 又連懐一七「世は娘るの文小肘取の宿う素是二條院後波の古
 奇小傍一吟あり後二蕉翁室に感慨一七「世北中の文小
 宗祇の若うまそと暮れよりあふ松風毛沙老海の彼法妙
 哉宗一七「世は娘るの文小肘取の宿う素是二條院後波の古
 七月お砂湯中此宴會に寂す案八十有二世を辞す依の奇
 「はらあーや鶴の林の煙も立をく水ぬる身まを眠むき

荒本因守武

荒本因守武ハ伊勢内宮の神官素より和歌連奇哉好く一時
 小名あま或日連奇具沙若席又陰一「小智法師の人くたされハ
 「古座敷を又まを何れ毛かみあ伊宗社傍一「ま一「まこり
 雲此娘王烏帽子着てと附ら水ハ殊又奥河里てと又えりる
 嘗く童子教誡此為又一夜百首を誦す一「まおとに世中若
 二字哉押は是哉世中百首といふ又國人等童一七伊勢後波
 とを稱せり且能借此鼻祖素里一「元月や神代のもも思えり
 「櫻子や菱鈴若系の落一種ハ此個高尚人の及びる所は多
 獨吟子句をたはは生雲頭一「飛梅や軽く「後と神代なる今
 多此篇哉後ハ不易の什多一「回味之後來全一「園女等若
 名家を出すも此人哉以ハ勢陽此棟梁とて其小智打屋一

守武靈像者募往時所崇於

度會外宮之真而其門

葉之所傳也先乾什

素出其心嘗師會

難點止附與沾測

沾測授之雪齋

後莫知其所在后乾什

索求而得之云為其古物可知也今取

以圖焉

蓮廬書畫



吾小一蒙茲我南堂阿孫也仙とゆふ一哉口戸龜原を希西指古哉
句筆の短尺よ美指也小てそ
其の句有りて此句哉蜂也ありと為とのハ根ある子晋子臨
每せり天文十八年八月辛巳蜂也歌一越くこと又以末
神河山峯此雲風峯の松風發句一招聲小今日と尺ゆらん
我世如奈

山崎宗鑑

山崎宗鑑ハ近江河原人本姓支那氏一々代三足利家の
臣なり長享元年依本言程上洛せ凡方村義尚三つ
うら兵を帥く追討一掃利を得茲同く二年空功よありて
肉古信不任せられ義照と改む延徳元年義照松葉あらず
一て逆く豊後討つ支那氏廿五策主従の別茂怒み重
致仕一三利家一掃抄厄り謫よ臣一後據別山崎此竹村は

非家奇人談

卷之十一

三

道徳素より和歌連舟小達一又能満も長せり或時道徳院
 駿河(宗長)諸とも糸依とて為り(巻)ける烟葉を抄
 て鉢(里)り(小)口(道)流(一)て(手)小持(てる)姿(を)足(ま)は(跡)鬼(つ)む(こ
 と(異)一(玉)ひ(ら)む(杖)一(お)あ(んと)す(れ)と(雙)の(沢)水(宗)長(一)蛇(一)道(生
 言(何)地(く)る(る)ん(鑑)グ(才)三(家)里(葉)する(に)鞋(後)集(能)浩(句)解(弟)田(耕)等
 長(り)根(を)澄(と)ち(近)末(或)谷(山)の(は)れ(ハ)滑(稽)句(在)ま(れ)性(の)持(ら
 る(成)河(穿)す(滑)稽(を)平(池)を(準)據(と)せ(り)は(れ)ハ(滑)稽(句)在(ま)れ(性)の(持)ら
 志(む)る(変)り(或)人(一)尻(毛)を(借)小(常)と(く)と(為)て(附)句(杖)全(け)が
 「水(鳥)の(尾)羽(杖)寄(け)さ(解)く(又)切(と)く(と)あ(里)切(多)く(も)あ(り)一
 と(い)る(に)三(句)而(全)せ(ら)れ(く)一(盜)杖(者)一(て)足(ま)は(我)子
 「は(屋)り(あ)る(月)杖(か)く(せ)流(室)の(杖)一(を)足(的)矢(杖)一(長)い
 杖(句)は(と)古(雅)あり(一)手(杖)つ(いて)歌(あ)る(一)よ(る)煙(ろ)か(摺)小(本)は
 志(ら)流(ふ)勢(杖)花(は)り(り)一(傘)を(足)ば(雨)も(お)よ(夜)半(を)月

晩年(西)風(一)起(く)帰(洛)漫(抄)琴(山)杖(杖)鹿(了)止(は)る(飯)居(一)て(一
 和(唐)とい(ふ)時(ふ)又(廿)二(年)八(十)九(歳)一(一)三(癩)を(病)ぐ(死)す
 或(る)事(又)二(年)の(叙)と(辞)世(一)宗(鑑)ハ(伊)人(と)人(の)問(あ)ら(ば)ち(と
 する(事)の(杖)据(る)あり(一)辞(世)一(宗)鑑(ハ)伊(人)と(人)の(問)あ(ら)ば(ち)と
 何(を)て(あ)の(者)人(と)一(一)後(慈)符(その)風(流)を(志)と(い)す(誓)願(を)を
 履(く)一(有)ぐ(と)記(姿)杖(が)ま(ん)か(死)つ(む)と(

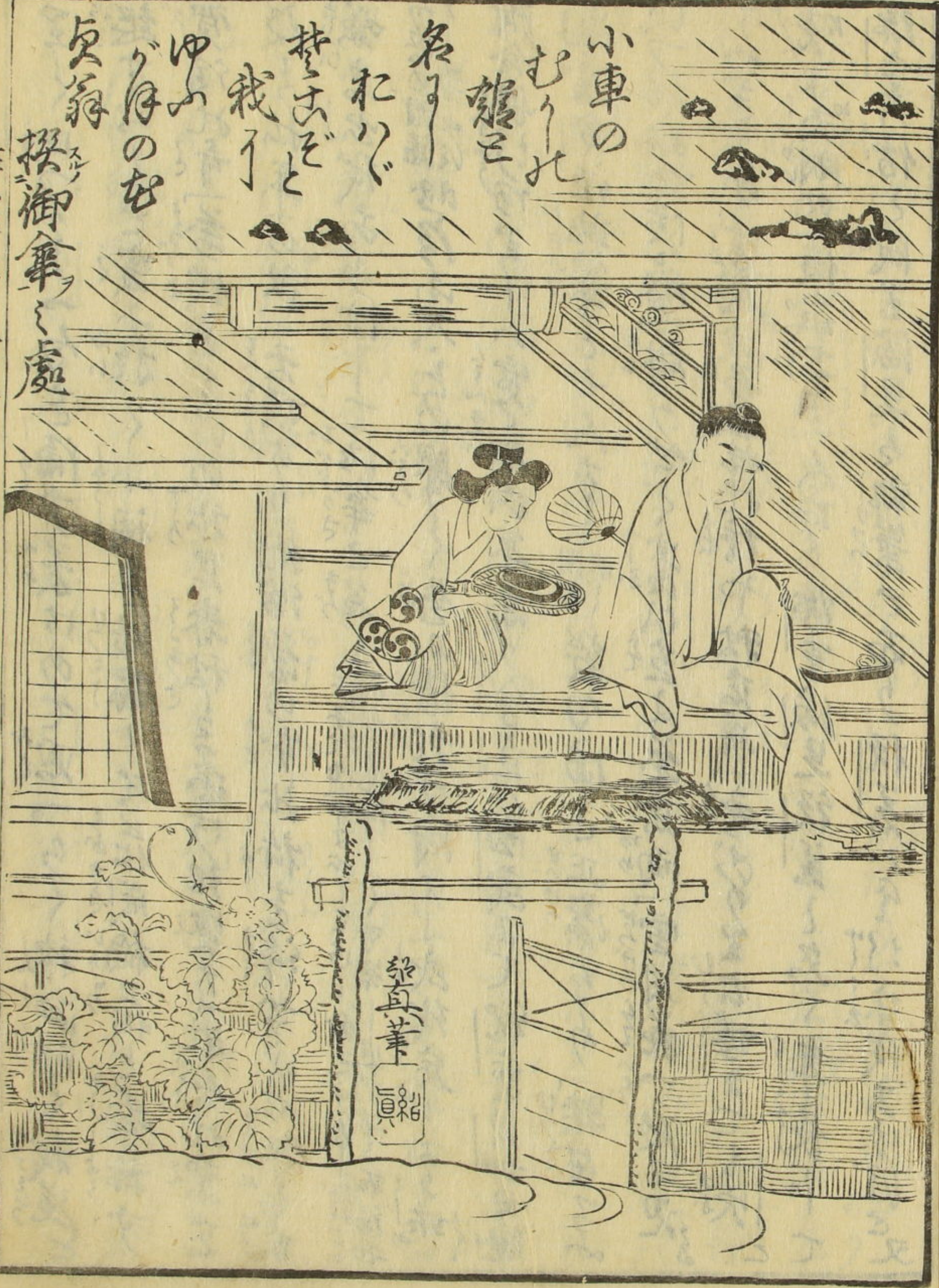
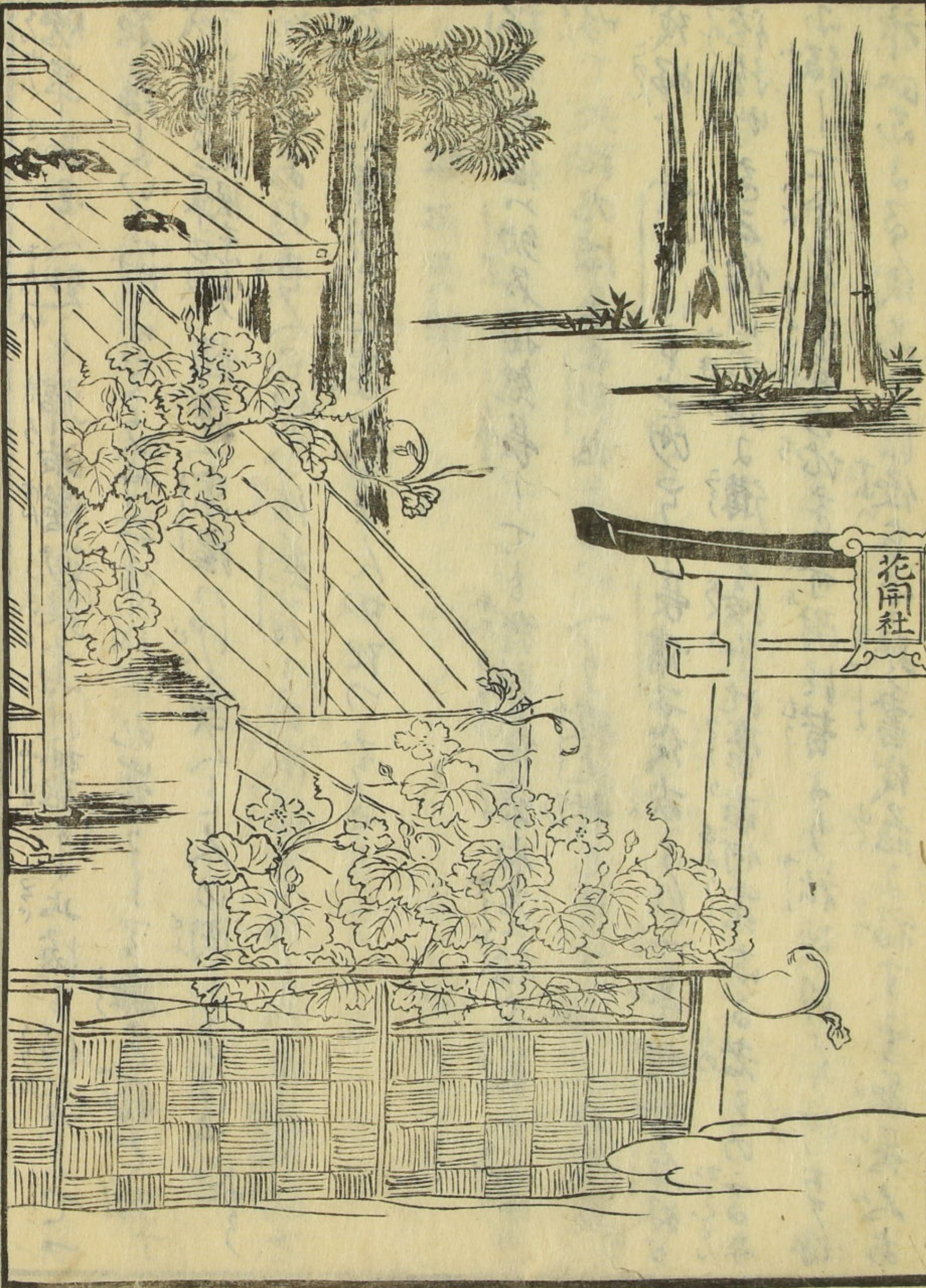
松永貞徳

松永貞徳ハ幼名辨徳長トモ(松)野(義)成(末)收(壹)根(を)若(一)句(ら
 呼(び)て(延)隆(九)依(多)長(隆)九(と)い(一)り(道)遥(軒)と(号)す(冷)小(和)奇(連
 成(婦)ぐ(玄)旨(法)市(を)少(一)長(嘯)子(杖)友(と)一(一)年(世)孫(系)好(ら
 徳(持)杖(を)三(條)の(大)法(又)講(す)活(作)杖(豪)家(何)業(あ)る(若)その(言)毎
 小(振)一(て)今(者)宗(野)の(地)を(寄)附(に)昔(より)社(何)の(く)何(者)杖
 神(此)あ(る)る(成)志(ら)ば(使)ち(空)契(書)杖(茲)一(移)す(空)杖(人)あ

伊家大可入談

卷之十一

花開社



小車の
むくれ
名
わら
持
我
ゆ
の
貞翁

御集る處

非家奇人談

卷之十一

2

榮真筆

里々口つらつら句を備す爰はめて思ひらく神道に我道と
 起すべしと爰小松く小祠を結構して花崗稲荷と奉稱す
 賀河比奇一葉代をその日の社名春秋と云はれ其宮なれ云はれ其宮
 乃ち此年の秋 云頂より炬燵の本此稱を許さずれ神と云
 嬌忠虫我あふはして此年と名く 天子此年と云はては合する事ありと
 乃ちも凡俗の事なり可なり進利する所也
 附合興行何事一の宮と云六年あり今主ハ西武にて秋重因如日能
 道長令使執筆と七人あり 附合 殺句満と正潔あり 睦月
 いづれ始の時一餅らせく食以立よ云長雨「雪月花」一度又
 うつぎう系一皆人の登立此種や秋名月「冬」の里古樓まで穴
 咲子失明の後此重二人あり 殊重満足祝善と名く年長トて
 殊重ハ僧と成里満是と執筆とあり 祝善ハ重以末成と云はれ又

可第の後在里何其の年一や有りんありて竟然祝善
 大佛殿北南北才許多を湯まぐみ川うら果樹茂極る
 榜をおして材と名く中小報恩花あり網子に妙經
 千部の子昇成以す花あり一六奇仙 上官子達磨大山人此
 或は定家等の六人あり
 像を画くあり吟詠所あり詩奇連能者短尺を集む直
 小差此丸屋 兼後を以て 圃に通じ方城東為式十百南北三十
 百 兼後を以て 名あり 圃に通じ方城東為式十百南北三十
 せり金権貴小幸せらるるはと世翁の碩徳あり承應二
 年小致に高八十三辞世 三 暇日ハ形と成りあり
 今乃朽るるを留懐世のありいふ余其翁はドめ方志ありて
 能は成報記す羅山草山の女子を以て人となし且立甫
 重於貞室為武梅國之令徳季吟種之末後玄札一書安靜宗

時乃松隈定重等み家宗匠なり鳴呼盛を伝ふ家

松田重一 附 美津め

松田勾當重一は勢陽神跡山北林藤了居せり生性十二律の
 調子成独々木の善惡を伝ふ形哉得ころといふ我朝の妙
 曠とも秘一つは懐抱又身武が極風を慕ひ道我位する
 在にが如く老後乃く貞徳の流刺を授けしとぞ重勾當
 孫又改えらるる「唯空の足と足やとの色音るが」其れにたぐ
 身とが系松鶴「松竹うろく常務や園の布思のけりき此時
 小して是妙河らんその寛く水七年六月八十三歳一七死
 つ人美津めと同玉山田松本老女が妻して能潜志妙子あり
 「鳴呼はえ常の何は松字「右云り志水ぬ藤れ手先かを松
 つより松坂の妻めを出生り

野に立圃

附 常水

野に立圃初名松重信姓能登市を居る松常居鳥丸家
 此館より近く平生お入して暗和奇名及も多つさい水里浦と
 言物松重より虫法を傳へ里狩探幽あり画列成地より在い
 りい己が長ずる所欠つ字足の本子あり「八子北隊をふ似せと
 松重魚「水水や汗も滂も夕後「山堰と終ふの名もや立圃
 「屋小くくさぞ家落禁ふと東山世人嚏草を（聖相の法談「地蔵の天
 を畫し興玉のい生性のは居る高擧て後世の軌別とるはは意海もふ
 を畫し興玉のい生性のは居る高擧て後世の軌別とるはは意海もふ
 うく是哉稱せらる引する時年七十一老父九年九月あり詩
 世「月空の三句目を今あるさうか

ま本松常水を立圃門「「松梅室と号は「玄来る年の歩
 みや魚千里「室暖の根候と留いと憲北梅「今日此月常も

後川稻葉より「初づり」望遠塗や千尋遠小沙言を継ぐ
能得彩式を著つに享保十八年小死す

松江重頼 附 妻澄

松江重頼俗名大文字屋治右門傳名維舟といふ父家小遠を傳
習はる風格ありと立圍と傳件すべし一彼等とて慈愍を抄する
慈愍が子「咄礼の持はるをゆく復形うふ」秋やけさ一足又知風
拭い極「料理河里殘ふ冬ふ」指と成り一此子生得後意
同つと交を絶ふと殺多ふ少き永の流りとよ布子集を撰す
保時立甫「管火の河をせたり此後うふといへる句成加入せん
成頼む頼沙の句「管火の河の中」と同縁なればと交がら南此の成
沙小伝ふ沙も句縁あり後れ多るより「進られけきごも遠く」
件をせは是れ小傳く「沙牙北初み姑く繼より頼返く此を娘と

他日南成害せんといひる沙屋出水を写し「強才なく南をも勤
嵩せり又毛吹竹我作水の時影山の正式とも牙柄ふれよぶ
あ里正式又父室亡母の退牌又「禁と慈北麓」此れ佛の巻に
いふ句成りせりも小頼はまきを織り白より不快との感より頼
室が裏の傳を「招致と目まけ成るややはなき一」けこの口は
はみりる室此を写し「送火とは身此の夫文字といの中此の
此句前表と成り」や此子百となく身備りりぬ延室八年廿
十四歳あり

喜本妻澄の初め重頼の門下にて後久慈北中子と名乗承感
頼のつ徒一重頼重才重好重欠何り是成は室との心長
澄との列又入んる成は頼ゆはは澄出水を志伊あり「破
つて貞想又屬せり」と「宗良法沙若葉つむ」や此小神「時めや

巨燧にて手此はけりるまに正徳又年々死臣

言淵梅盛

言淵梅盛の京洛の居して院心子と号は「東より西にたははる
起初日ふ」茶葉や蔀も唄も悠たる「好人の好村とあるを
性う素」養生者如き方れや出づりげ又奇は小達する此は
何ぞく幕東へ 居る齡も院に「院にぬと園隣」そ故人の季
吟を進多り吟叟の 菅家へがらるる是は松老が先客あり
元禄十二年四月八十九歳に〜死臣

山本西武

山本氏之初免系終は位して御を高ふ後了入して西武
といふ世にお秘すとい風か朝とも号は「大上戸がー小在りふーざ
うあ」兜はくくらならふや 文殊ぬけんどう「妙しく小身の威

果て何とせみ「芋も子我生ば三ふ此月夜う素」金持の懐さうよ
亥夜子う素世人登葉あり河家の執筆ありある秘決意く
習い得たりゆも毎葉三物を組く他小伴さげ唯我と正徳
西武とけみ言忘我始の人とすは時う「河家病床は控く
此子小能及の武を懐さ出ぬいはく

能指批点の俊照金中へ列ち伴名中の批点此次人の画像
一幅巻中の合名時小掛可程の遺物小残巻中の巻

新月報白

長頸丸判

西武後へ

其の人多知申る新油切小表戒せらるるの及の要加小叶ひ
り方りりご時人中合王とごゆ死してより夜露流波を編して
初心成導知樞といふ出を著して能の麻枝立つ何の年うや

白
の

家音
也

子
也

子
也

が
也

家音
也

子
也

子
也

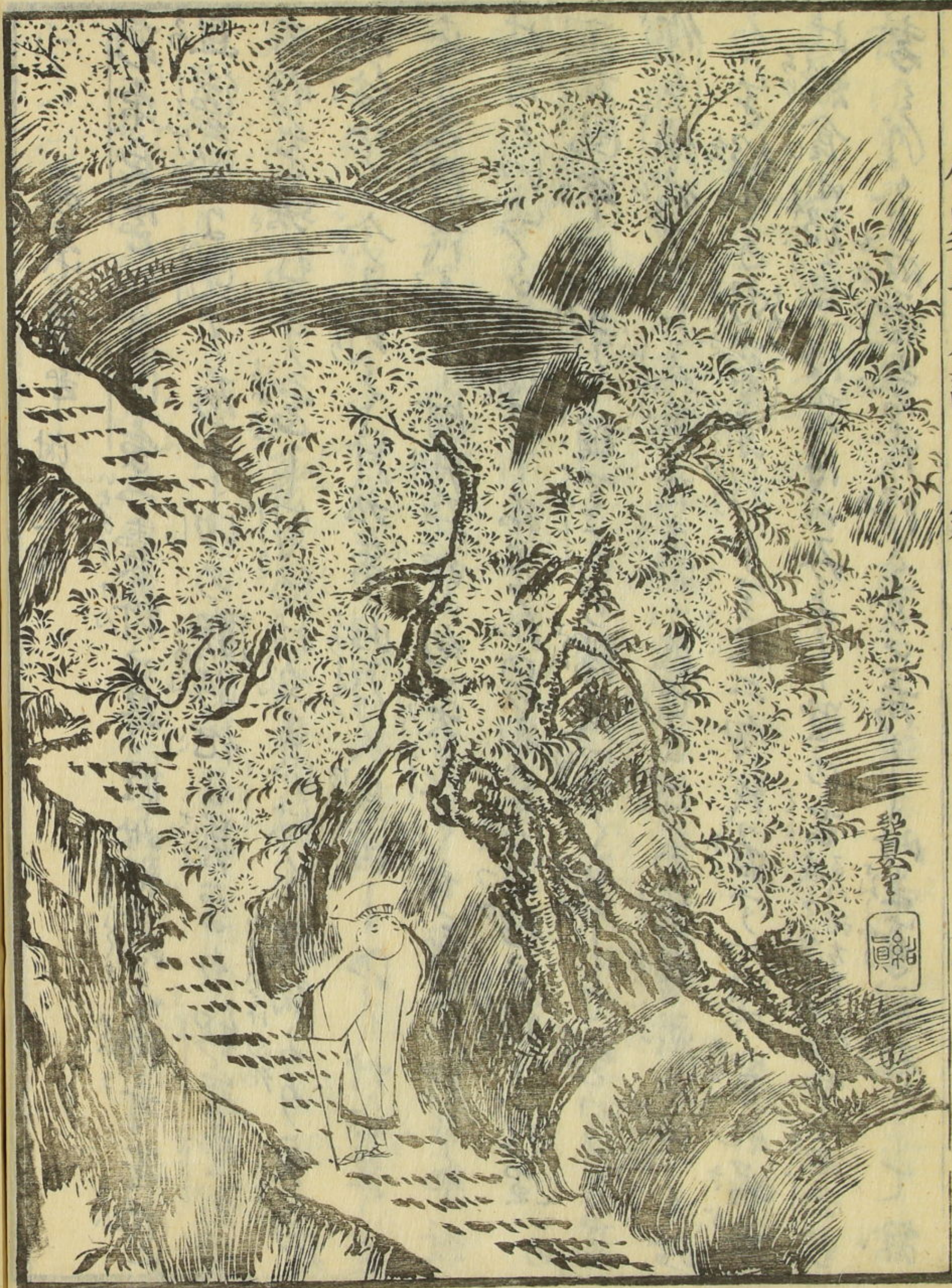
存け世七十三歳... 死せり辞世「世の世くを了」
云々くや潭古つ

鶴冠井令徳

鶴冠井良徳ハ系沙島人地隣唐と号以後は尚今 天子
人王百十二代此法律を避く之徳と改む「徳比江の波比波や松
鴨子」稻妻の松とくげ刃てや夜這星「神塚名續り杉紫の
著うろく」言合羽音打拂ふ徳も有 或時伴歩島守
武又徳く獨吟子句成存に沙島色深く生才を感ざり
延宝七年九十一此書を終る詠智徳波集り「良祝と存
て」巖手い何ちく成するう山此に良忠と何月と「冬てとい
此三禁やふえ依今日の表と良徳が後り「祀すハ忍く
世一つ有る屋」

あ系貞室 附元次

あ系貞室初名正室一囊軒と号に世豊巧小徳奇を源
且徳氣又達す有る「沙の歌賦他は美なり秘重室を
出好を成むる子言一旬記此又いはいはく我幼あり貞存
訓仕々今又糾く廿九年世及人是片一のく廿六年と
其免件成文一時沙此叙句「天長くち至と不むるや秋
此月といつる小「源」志まんの益忠文而後と撰「た里の
子古風中に在く稍と其の端成存く若して是ハく名
作の後代までと人身成事轉る世に傳ふ室等撰小徳く世
分を起し「の系東江」又二句成存す「い比登れ巖
此離食小徳名「経忠厚のみあり」世の雲「或る高作れ
者之川多「成存意我」なりとあり「此三禁成存して餘



覺
印



是之
こほり星を此
の山

芳山題咏多矣皆

不能入

此妙境

業を燈と嘆息する小堪多あり「うごふあ今の雨屋は枯字
 「涼」はの雲ありたれや夜半残る又幕すべし高山鹿柴が
 西村若掛抱小「借銭の淵の埋まぬおろふ家貞室少年ふり忍に
 ほしにるすなり何あるおぼふく有けんいこ興何里と其角の
 記（おぼふく）載りり寛文十一年二月六十に業すそ死せり（おぼふく）
 て「松蔭や目ハ三五夜中納云と生狂文貞室がむり」（おぼふく）
 鹿崎山の月入んと思ひ立しそ「蕪箱の記」（おぼふく）出たり
 室子あま元次とのふ幼に「そ英蓮書才何り」（おぼふく）七夕や海王
 多ほく玉北橋と此句十三葉の附書作ち全と玉満集了
 了元たり

北村季吟 附 池志

北村季吟の江戸山村の人はドめ医を以て業す一屋店といふ

王後一平安玉津雪の商祝とま依能借を学ぶの神め貞室
 我少一「中年より貞室を交く拾穂形と号せし」貞室を
 難る「時の名ち里といふ素情吟強記」そ「國学は長きり後
 進その乃我主とする者大率此叟を別る源氏そのくくり
 了」（おぼふく）源抄を著し「松林」了「了」（おぼふく）素情抄を述にそが
 大和物かと王佐抱を佐等小玉るはで狂解す依取の虫玉十
 餘種よれよご里とちんはれは空学ははるりや、
 家の法強又連して昇東へ居れ奇学所又補せられ食源なる
 乃我揚りる傳了「名譽此事あふはや能風いあご古轍をい
 脱をにこい「ども又一種の種部有り」「一僕ごなくく「何りく
 意アらふ」後筋我よまてや「知ふる松橋」ぬるを諭はあハ忠
 肉信哉「ほづくと在すがぬ」流松「あまは山沙をともちた

兼在り家宗は作を續で増山此并成撰に雅客み家是り
 依る宝永二年八十八忠年壽を終ふ
 息淵表と名小奇學西小呂保花果院と号は後生畏るど
 此子の風格厚く乃翁小後は保「蝶輕」
 名附ぬ和加右ゆ一山橋「目比氣此附ぬ松阿呈揚院院」天地
 此時とゆゆる時取ふ家元保十年父又先ぶつて死に五十有
 餘年をむむむ

秋後徳元

秋後氏ハ濱河波隼此人の徳因秀信小信秀信石田了
 業一後するに及く已も亦長良河を渡り透承刺髪して
 徳元と改名一帳字己号は初交和奇成指蘭して江戸佐樂
 御小位せり一年上京して冬つ入る即ち百歳興以有り「京

因舎よはの意若家めぐり冬「育うらまを能れうどひす徳元
 蝶の舞隆我沙通又留みらん来江下又獨吟千句を存く名
 んよ知らは秀永中室粒物子集を撰するの時秀遠有り
 巻防小一旬「妻」月や小月人目出く徳つ之松遂一一世の作
 者と稱せり保「大祖」も「屋」ともいそ「弱智此富里」何と尺くも
 秀やど玄如抱り奇「善す」和初ん抄有り江に於て能出を梓
 するは是我始と保若別小於く妙す辨世「今後でん生多ハる
 月夜うかき大空輝の文小掃水り回く幻化如夢如影如氷月と妙
 奈保りか

石田未得 附未得

石田又たつ江戸此人友智阿小位きり何ある有くや玄くお
 妙よ保る幾種も奇く再江江戸「来」里移みき中一々名を来江

と改め徳元玄れと更りと京にて重頼を徳と稱み遜より
 小の乾榮と号に「葉子やりの香をむるち」の表「記」並
 て藤らまぬ伽又すみ空うか尚時句作の伴に玄れのとより云
 掛けト書には松子小うに里立南と出附を号し一人と云の
 字を名成くん後松子又屋法と頼向の區區たれども空清
 替の皆缺すと云し一寛又九年七月八十有餘して死に
 男未孫父の業を継ぐ良榮と号に「河言此時毎の字や屋形
 和備と狂奇をも能くくつ人多うまうとらふ天和二年三月
 此世残玄備

高鳴玄れ 附 凶夕

言鳴玄れと號山田の産和奇茂物丹意き人又學び能備を
 空寂小傳りる世長此末年江戸へ來り醫術を習りて傷ら

能備を號しゆ生性もと抑綱して世に小跡あり和紀
 友とち誼云して吾業より能備此くと勝里など申し
 けること四十二の表よある「守り也」今年に居く十二
 神或人探函が友士を給此契我乞るに「名をえりや此
 ぶぐらふ友士を寄るつし又一「嘆息のり母とめて友物を法
 「番の何ふが身臭か」ん吾れ益時小尚く云掛の妙手と名
 立しと巨室を法うか一年瘡を病するに自ら瘡ずれども
 功我奏せに教目引出居ぬまうし「君よ好るはたれが長日
 を消す法有に」と言獨吟此百韻忘る小を和友句「卯の益
 落るの風のたこ里うか」いざ思燈よせん松宇と世附句祈禱
 ちや威くりりり登禮いつしう海おけり或と和連中る歌
 一書持東里慈さんる我和む子速速して巻は廿日ばり里

又同書成巻一已れ名ぬのり何里くいまぐ罷り候
 怪無しが維持形一や又又及えに面倒あぐり今て及座て
 多ぐこのいらいらとあく再お息して何とくぬ整目連申
 打揃ひ取巻を持糸一扱はどめ此巻本第又ほぎれぬ
 所形引合さし一取後の巻この懸多く善何り何まの才匠
 加添づーやと官ふれ横手成拵目く上達する扱ど
 我も後此百小すし先里後巻成用いらまよ作者ぐと随分
 忠情あれ已答とほとほと即智あり
 門人山夕江戸又信一々業成を以延室あり享保此間には
 代一して纏らり「意い」一「延室綱目上禮山」いあつほや誰が目
 りくおと雲小のる初代山夕「粟む」や宿世蟻此屋衣二代山夕
 「人といざ詔書ついく堀の梅三代山夕

池田正式

池田正式と和別形山の藤士より能満の欠風一して懸係種
 情あ里世又嘆えとる句「揚と影」ぞよ意此衣ぐり生身軽衣
 勤ゆゑんほりせふ花を忍ぶるあふはと痛恨して「そはふ
 居く又ぬや芽蹄のたふれ先と送る「右方の又送」一便
 意又ては為と暇とほりる直小右形よゆ能「意に意回」
 してまぶる此枝を折里阪宅一と右右人持け奉る大又悦を
 承ひて「その歌成下ける」何「垣あり」壁百ちりく家居一て
 間づ能意ぬはる屋一この隙一「風海の針」里あふはや或
 重軽毛吹系成撰す此人名「屋列」を妻のは「め此試筆」ふと
 い「ふるまを」成「おす人」一と物「たまり」も何「ら愛心」一と
 浪急の喜歎といつる者の句は「怒らり」式「水」を「懐」里「書」室「書」

いかに成茂一して空作の河屋まり成茂ト云り狂僧人咬て大
 一怒り直小果一怖を附りり武是又醫狂狂が公をたぐはぬ
 狂く屋みりる時人その柔弱なるを識者者多り里一申ふと
 立持てる身は猥里不為ける成稀異を添も有一こと又狂奇
 を去れ免り旬らの奇合計百首何り作名して平歌實持布衣
 因送二人とせ里今に於て海形する狂奇者海後古の狂名と云
 等まや掃と掃あらん

荒木加友

荒木藤原醫術を以て江戸本葛町ぬすり至一年と係て
 欠つゝのり能名成加友といふ寛文中此人有り其句古厚く
 尺に今人けり一跡をうるは上代下えいさう山の意不々家それ
 年壽を志らば同時書抄は同名の能事あり其語形

市井ト養 附 養友

市井ト養子々寛文の頃名は長沙に法眼又曰養を甘り
 和学小通一狂奇を能に神め宦達を纏りて鉄泡河の地面
 探領者財ト養の本居に己と思ひ一わうみち我たりハ卯科あ
 るべ一又能借を去れんで欠符又候あぶ一改年の法養あ能の
 天下ふ「表」月己空やゆふげれうらうら

牙智一晶

牙智一晶ハ系抄此人はトめ能借を信徳又候まび後又信徳
 此つ下小属す「初日」系光里うい居く鏡山「短衣」ハ又其ふ
 母の登収う系「耳」ゆく所よまをわ能能取う系「松原」一飛

江戸抄子
 小外料
 かのを
 うふはち

しるし

しるし

しるし



しるし



勝ちいけし一雪若言晚年を徳が崑山の宿成傳りりくは
戸へ来里冥靈堂と号す室永口年四月六十有餘葉小
して死せり

申鴻貞宣 附二條

申鴻貞宣の蝶々子と号に又松島杉松松杉とも稱せり初め
季吟小はふんで後より貞宣に倚る葉活中江戸浪浪橋あま
位きり「目此本や秋津すどちのこ里此年「強き足稱つる
包むや雪乃及或時吟使若伴へ「きけ復此季吟は縁より
蝶の蝶々して福里り白小「入ると涼松庭子の松と吟使若伴
せりまうするも何事
享祿の比本は葉板は蝶々子とておのの字子二
長者有り恐く此人を慕ひしなり
禁あしと能楷を好む一年元月「死ぬまの生る若あり子くの
はるよのふ文字葉且もを重ぐとき字方局を形句由り云

風ふるハ手扱ありと云々以候長矣一たる

神璽忠知

神璽忠知之江戸村人俗稱長三爺承應の江井坂表法が能備
城海あふ「元日や何又諭ん召ん事一何んつゝぬ小古寺の墓
う赤又「公家や屋々奴昔の言此枝木の秀保より白炭忠知
嘆美さうは具南が難陀集といはく公家と云え一忠知が
月や何んいな親身の親法抄と禱せし後切り何一淳世
とい云方うう表ありと

西山宗因

西山次存中一も素肥後別加後家名屋あり家傳の江井坂の神
蓮寺を昌孫又傳ふんで宗因守武の風流被さるふ天性奇才
何れも厚く進むり召ん然り実永中至家性轉るり何

まゝく玉を去り竊り能道ふん我よせ何風我感破して下流此
始祀と云家難難一て宗因と改名一此の如孫又函樓一被て
難波の天満より居居せり梅孫と稱せり無我忘吾と号し居
を向榮といふ此翁重粒と交り流るる鬼妻が筆記又見たり
小梅孫重粒を抄と云いえるの能なり案するに重粒は長孫と云快の後里村ありて
蓮寺を傳ふ梅孫つを同して何くお舎一傳束すといふ事あり何やまり束る
と云えり鬼妻は同梅孫重粒を延宝の比江戸にて松倉が紫能流法林
抄にて此の事いひ伝ふるなり
我唱初りも小折長此奥の下向何里一を遠く江戸十百款を興
して乃我弘む生書取小梅翁一けきの家小後林此本何り梅のむ
時一奥別岩本の株主風虎露法此二公此つ又入玉ひて上子の受
あり一あるの流法はすく弘す里一とくや或日市村竹く度芝
居尺物に何と云小折長意翁居合ら何く初て此孫又義面せり
何一色つ人何果が向案二子とほけりり竹く進りてと此又

方園相撲大

時多かくきくすのふとのの
 せりての切多恒根卯花
 風より子若鳥麦一箱を我宿よ
 平云多め、もてい廻又う状
 取出の火打竹筆月
 鏡すそけつるりるの秋
 少とそり行てさあつ飛屋
 遠旅を夢かたてきちあつ
 歌多川岐さー廻向れ鐘

さうなる小橋つる浦たり橋
 祭礼を後多多アしり友多
 多の多のそりあつ歌多
 うつる多れさ十二双袖嵐
 花乃境耳よあつて多
 花乃境耳よあつて多
 風の口は多とけわらふ
 先イ口ハ布目れ多

伊勢奇人言 卷六

泥柱のらささく風よまじく
 同柱をいさやうらん多
 うん候候して多
 世多ひ能もかく能ある
 大河のハ能海よ 万箱
 礼歡や柵 万来せさがる
 舞火焼てあ同片乃箱
 者札を以十八ヶ所打さう
 珠法乃園入能おの秋也
 此候れ多をさるの幸う

さとら眼子南行とて行
 腰血あふらよ海けけ候
 小次原恨ら文を海さ
 世多銀箱乃もか
 相を多るのむれをらりて
 本多
 伊勢雲十九
 長六
 梅

時名のかくをとり外之の
大車の声とあまう
 せりそこの切な垣根如花
 風ふりて若葉一輪を我若
そとてまきま
 雲ふりてむての廻文乃状
 秋の月打付竹葉月
後重本
 結すそけつる夕暮の秋
まわ
 夕暮りてはあまの暮
 遠海を歩けりそ芳ちの
あま
 歌あつ川波さし廻向は
 さうなるふ坂つと浦なり橋

うん埃埃一して種
 ば世にひれまが社ある
 大河の舟の船渡り
 礼歡や柵 木木せさから
 舞火焼てあ風呂乃摘
 春れをさ十八ヶ布打
 孫治乃園入結拍の秋
甲
 内膳は交をさる河津
 さとら眼を内村と
 孫より下九条の
秋

糸礼を役も受つて
 是のそこのそこの
 かつの若れらふ二双袖
煙のぬれ
 ねろせ乃そこのそこの
は
 材ぬれを定取
 ちりちり
あま
 花の
あま
 瓶の
あま
 先イロハ布月
 泥孩のちりちり
 阿娘をい
あま

膿血の
 小次原
 世多
 付
 三町
 三町

伊勢奇人談 卷之七

十一

字我^{まき}を^{まき}収^こ梅^{ばい}孫^{そん}小^{せう}窺^{くわう}ひ^ひる^るに^にお^おや^やく^くと^と冠^{かん}す^すと^と教^{きやう}
 け^ける^る後^ご了^{りやう}一^{いつ}蕪^う孫^{そん}此^こ多^たを^を朱^{しゆ}子^し又^{また}亦^{また}て^て生^{せい}豪^{ごう}戈^か戎^{じやう}稱^{せう}嘆^{たん}
 一^{いつ}あり^{あり}元^{げん}そ^そ一^{いつ}代^{だい}此^こ名^な句^くと^とい^いふ^ふに^に必^{かならず}落^{らく}や^や重^{おも}多^たあり^{あり}なる^{なる}意^い
 取^と件^{けん}六^{ろく}色^{しき}此^こ什^{じつ}古^こ今^{こん}小^{せう}索^{さく}一^{いつ}と^と伴^{ばん}廿^{にじゅう}り^り又^{また}「^{しん}秋^{しゅう}表^{ひょう}の^のは^は菱^{あし}の^の古^こ
 き^ま云^いう^う系^{けい}一^{いつ}世^よ此^こ中^{ちゆう}や^や喋^{しゃ}く^くと^と後^ご進^{しん}形^{けい}も^も何^{なに}れ^れ「^{しん}後^ご形^{けい}を^をや^やい^い
 此^こ月^{げつ}里^り紙^し帳^{ちやう}有^あ胆^{たん}の^の漣^{れん}を^を残^{のこ}る^る松^{しょう}鶴^{かく}此^こ句^くを^をと^とり^り卓^{たく}然^{ぜん}満^{まん}と
 異^い新^{しん}古^こり^り余^よ梅^{ばい}ず^する^る小^{せう}史^し紀^き君^{くん}程^{ちやう}了^{りやう}「^{しん}滑^{くわ}稽^{けい}の^の能^{ねい}借^せの^の如^{ごと}く^くと
 云^いふ^ふく^くろ^ろの^の戲^{げい}云^い戎^{じやう}戎^{じやう}の^のて^て人^{ひと}を^を怪^{あや}む^む世^よ世^よ此^こ人^{ひと}又^{また}加^か方^{かた}ふ^ふ心^{こころ}
 たり^り是^{こゝ}云^いふ^ふ此^こ翁^{おきな}若^{わか}能^{ねい}揚^{やう}お^おは^はつ^つく^く此^こ場^ば小^{せう}暇^{げん}里^りと^とは^はは^はれ^れに
 古^こ今^{こん}不^ふ能^{ねい}借^せの^の上^{じやう}手^てと^とい^いふ^ふを^を難^{なん}波^はの^の宗^{そう}因^{いん}と^と伴^{ばん}賀^が此^こ能^{ねい}書^{しよ}書^{しよ}亦^{また}
 ら^らて^てハ^ハ古^こ一^{いつ}と^と云^い傳^{でん}不^ふ天^{てん}和^わ二^に年^{ねん}武^ぶ部^ぶの^の宿^{しゆく}舎^{しゃ}又^{また}及^{およ}す^す仍^{なほ}年^{ねん}七
 十^{じゅう}有^{ゆう}八^{はち}

井原西庄

井原西庄の梅孫のつとめとて大坂後林君一人あり一日位
 吾^{われ}此^こ社^{しゃ}既^{すで}小^{せう}於^おて^て獨^{ひとり}吟^{ぎん}二^に第^{だい}三^{さん}千^{せん}句^くを^を吟^{ぎん}く^く空^{そら}あり^{あり}二^に第^{だい}第^{だい}又^{また}
 二^に第^{だい}第^{だい}とも^{とも}稱^{せう}せ^せる^る依^よ松^{しょう}壽^{じゆ}軒^{けん}と^と号^{ごう}は^は「^{やう}我^が意^いの^のお^お月^{げつ}も^もは
 を^を初^{はつ}度^ど「^{しん}平^{へい}橙^{てい}や^や手^て亦^{また}く^く生^{せい}る^ると^と意^い足^{たり}酒^{しゆ}「^{しん}本^{ほん}持^ぢを^を去^さう^うく^くれ
 仰^{おほ}く^く衣^いぐ^ぐ「^{しん}鯛^{たい}の^の意^いを^を足^{たり}ぬ^ぬ里^りと^と何^{なに}に^に今^{こん}白^{はく}此^こ月^{げつ}「^{しん}大^{だい}崎^{さき}日^{にち}定^{ぢやう}ま
 此^こ世^よの^の定^{ぢやう}ま^ま此^こ人^{ひと}あり^{あり}と^と必^{かならず}学^{がく}戎^{じやう}戎^{じやう}の^の鳴^なる^る生^{せい}文^{ぶん}素^そ人^{じん}を^を名^なの
 お^おも^もお^おる^ると^と亦^{また}著^{しよ}す^す而^{しか}小^{せう}夜^や嵐^{らん}一^{いつ}代^{だい}男^{おとこ}等^ら此^こ系^{けい}紙^し後^ご世^{せい}「^{しん}
 仍^{なほ}つ^つる^る近^{きん}代^{だい}戲^{げい}作^{さく}者^{しや}の^の逸^{いつ}事^じ亦^{また}海^{かい}邊^{へん}書^{しよ}つ^つた^たる^る此^こ門^{もん}又^{また}い^いひ^ひる^ると
 い^いひ^ひ傳^{でん}ふ^ふ之^{これ}録^{ろく}中^{ちゆう}小^{せう}於^おて^て又^{また}十^{じゅう}餘^{じゆ}葉^{えつ}

推本才磨 附 墨本

推本氏字ハ少文流達妙人喬徳孫と稱すはドめ西武ガツ

行くと別武といし里西宿が才子なりし時ハ西丸おと西磨
 とも梅舟の妻を娶てあり才磨と改より「思ひおと梅舟つ
 り」杞柳うあ「梅が香又文ゆく笛や内曹子」杞あまは咲
 て空ま「慕うあ」香木立いうあ「や山の唯住居いづれあ
 年ホク有けん江戸へ来里」身北隠家又山を買よりといし
 附句「た里州の能宗浪海をとりみ此哉雅ざりて受て思く
 浪海ハ此乃名大家能るに買内北あまの知はるハ江戸名能雅
 忍るゝにぬらばと空年の夢より又「あま士を我買くをせり
 三川北常浪海修くはま「鬼や南の年を月り」や夢のあま士
 として空過我改らるるやいと種徳といふは「後あま
 阪りえ文中八十二歳よりて死きり
 北條園水と才磨がつ子よりと名眼長士と号は生涯清くを

宗んが既籍の播き守極「がらくと山系あまあまの徳厚「浩
 幸も編笠ぬがぬあ山子うあ「ハ野や町ふり徳のをこのつ
 宝永八年よりは祥世「ねがらく引なく種の子徳」

田中常矩 附巻末

田中常矩ハ系能名人あまと号は本存相名流のつありしは
 季の性年愛風「て一旅を立の時又空地に於て後林をこ
 ちふる老いた抵此人の池よりいづるといふ一年五百額巻頭
 「館」あまが娘の種や是れ常と録して地へ女を娘と称さる
 又「娘」あま三千の林橋能色あり
 父常長ありと風波ありと甫門よりて松風影と号は「初め杖よ
 ハ里」果や極麻本或といふは能を此人の甥たりと号あり
 我憐みまきく子とせりて

田代松言 附 正友

田代松言の江戸名人延宝中 瀬治郎又位して友人正友と名を合
 世法林新三号一を調日く小変化一一字の働一句此録情了
 宛人を勤後一む是後名く法林飛神と名く一辯くや吾等の
 若者意修以一言折や昔より久し法林此骨の江戸風より
 ばれ心皆人能得てい云ざる一是夫の子と正友が功あり折言
 梅箱の東好する小遇く言小後く十百韻等を棒打しはけ
 江戸法林はうんふり一己なき
 正友と伴歩け人松田重つが才ある延宝の江戸一末里松言
 己力成合せくも此及成廣む一おの陸受つけぬ意もく家

菅谷言政

菅谷言政も京濱名人何水のつ又遊ぶるを去るは同時江戸
 小て盛ん又法林の江戸にさすこはおお水もいふ事一了「末志」
 れ古武派の熱本古と幾句して句ら想本古才道社言政
 と名けりあり古風名能士と年福まもく「起承」子代の松
 加せり聲の神くぐら「起承」小桶又泥鰌さぐのみ又一風
 家と稱しつ屋し

世西言水

世西言水の京濱の聲も此能風云れより出川端傳了を此
 後朝まて風下雲と号は元福は名曰才小震ふは云々
 とは「本枯の果を何里り」海名者語盡而意不盡可謂至妙
 是より一て本枯の云水と号は「も宜きるふ」「度りり目枝ハを
 江の内に「尾寺」唯業此世の友る「子規」は「良の柳」
 伐水より「文持」香附けり「榮木」松「本味」あふ人ふ一香

此禁「火比影」や人よて「津」に「現代」を「変態」不「大手」可知「後」江「人」
 来「く」江戸「新」茶「を」著「一」社「を」清「く」海「く」延「曲集」代「撰」ぶ「享」
 保「七」年「九」月「七」十「有」三「一」く「終」る「つ」人「會」澤「一」本「抄」の「句」成
 ぬ「く」曇「碑」ふ「沈」す「と」い「ふ」



伊藤依徳

伊藤依徳神名宗尚榊材園と号に「系」清「一」居「一」て「和」及「我」
 思「等」と「目」夜「お」會「一」そ「極」る「成」修「す」る「あり」化「り」方「一」と「い」ふ
 或「日」東「武」管「意」房「あり」文「虫」を「繕」く「上」部「の」風「作」い「ん」と「言」ふ
 抄「名」友「人」教「習」集「と」銘「で」酒「敷」斗「よ」ぬ「ぶ」興「ふ」系「一」句「を」作「て」
 ぬ「く」答「ふ」一「兩」抄「月」や「つ」は「げ」く「り」う「成」つ「ば」と「言」即「妙」知「ぬ」屋「
 一」系「士」に「流」る「三」月「七」日「八」日「う」系「古」今「題」芙蓉「作」無「出」此「篇」右「者」可
 稱「通」海「一」名「月」中「今」夜「う」は「る」子「も」何「ん」晋「子」は「く」い「は」よ「い」の


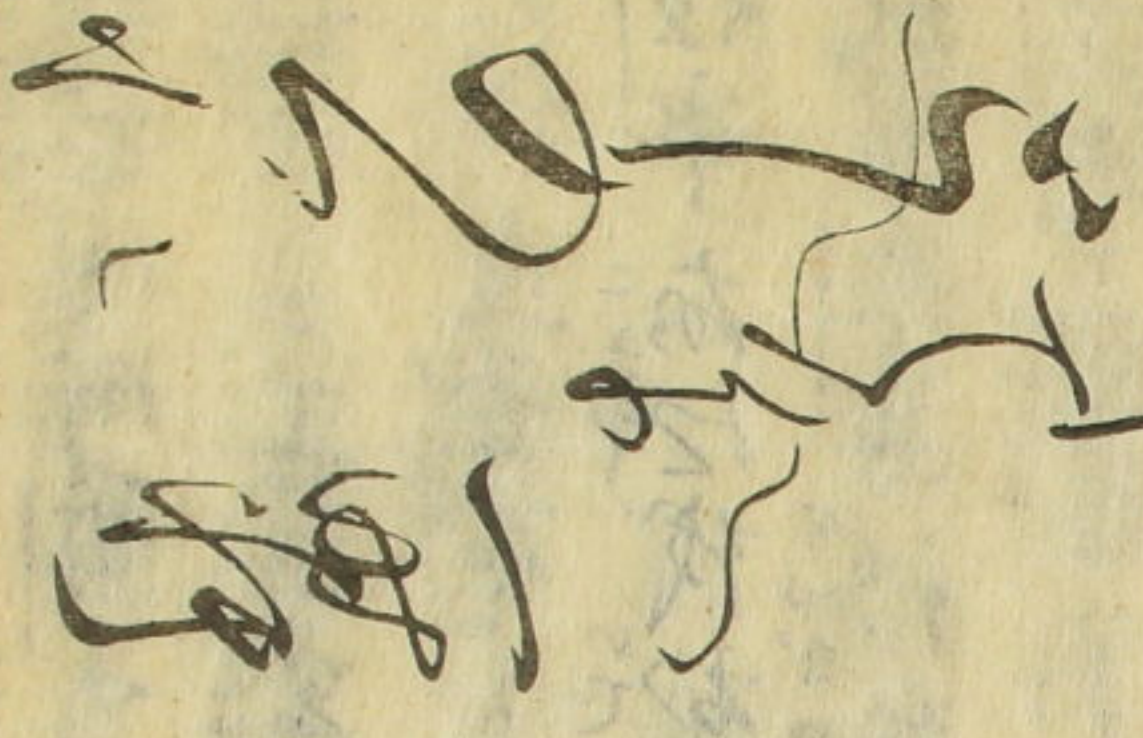
伊「や」人「比」世「の中」と「い」へる「親」急「り」是「の」今「年」就「中」揚「先」郎「と」
 白「氏」の「年」を「怒」る「る」も「も」叶「ひ」て「老」の「誅」を「悔」む「一」と「い」ふ
 り「系」系「言」き「こ」室「の」林「う」系「一」照「言」て「大」招「う」は「一」社「堂」月「一」忍
 や「女」若「眼」鏡「う」此「言」み「ふ」は「く」備「す」る「一」或「虫」ふ「い」ぬ「小」の「子」
 幼「ふ」る「財」負「荷」は「身」を「荷」ふ「の」方「を」世「一」洋「す」小「徳」比「一」字「を」
 以「て」は「箱」双「一」て「後」の「西」武「林」堂「よ」後「く」学「ぶ」武「列」く「一」向
 盛「成」成「妙」に「せ」り「と」中「年」志「ぶ」く「後」林「の」後「よ」興「一」て「妙」父「若」
 伴「を」變「は」後「年」眼「を」苦「い」て「正」風「よ」帰「す」る「と」方「ん」享「保」七「年」
 十「一」月「六」十「有」條「一」て「及」は

伊藤め 附 隆中

伊「め」を「伊」野「松」坂「の」人「生」信「和」奇「を」好「て」風「俗」何「り」燃「燭」す「と」
 美「津」め「成」妙「一」く「生」信「境」く「一」の「る」一「夜」何「く」や「左」衛「尉」の


 伊家奇人談


伊家奇人談
 卷之三
 十五
 伊家奇人談
 卷之三
 十五


 伊家奇人談


伊家奇人談
 卷之三
 十五
 伊家奇人談
 卷之三
 十五

其才氣すくく此の如しと享保八年六十歳して名我知鏡
 と改め冠里公若母君人仕人回く十一年四月六十有三月て
 死に穉世「秋九月妻の贈石一官の愛り現り有世阿孫地化
 國西氏の家依お若人はトめ金つゝ學び一有とのひ後梅海
 小從てより隆中と改む一時軒と号す「正名や松又はトめを
 妻は月」とく愛く若人返せ凶極むそく世福仍復す「遠く
 常た「いさぐ振ふる衣づく壯業より醫を業そして難波よ
 逆なり又出能して名は「中」之孫五年又致に

上清鬼妻

上清鬼妻の揚州伴舟の人針料を以て流俗又逆ぶ家多し
 資用小乏し或人その一女被権貴に妻を奪んり城すくむを
 奪り此を固禱す世性の嚴正なる古率初の如し猶も我或也

意つ海西と悪事をけりや死又た小亡少若法念を財ぐ意こ
 いする大いな依妄淫あり考後巨能信を重彩はばふんで
 鬼妻といふ元孫享保此百東山と厚彩して名は才又愛ゆ
 或財禱言我一回せり水く「庭あふふく鳴くる山葉うふ是端
 的機淨何減桐樹子「信意の心を」流片一流片つゝ露ぬぬお
 然情歎面「復のあこをぐは「ぢやと云れりり「あまのほ里と秋の
 空を依るあま此山此句雄澤得享青蓮風骨「夕立の又や何変
 下結はくや」砂水の捨取ち「出たる声「妻は所や妹が湯を
 顔くみ里「扱すとや何ふ面此返る天性親屬」して信強
 隔らば人言又詭秘するる知ぬだ「其はトめ句祀していそ
 已二十小満げるは先少松江の翁と梅海到彦の命よあなる
 「ちよとんふ八逆起もまき「吾世山とのふあふよ」橋に懸を下て

ぬらくと附り執筆より吉野山と執筆のありありと答られ
 尚然して吉野山の燈籠は祇園といく執筆は人たたり
 けそのくる古奇有りて名をいつは里と云ふが名を何れむ
 くは彼玄旨法中より名を感ずるに録有り扱ふそ此子
 業成る業成下その御書を達と云ふ一箇あるも条件は
 此元祖と云ふ一筆紙の教習にて意翁の行拂するに違て
 「何るく扱と知れは名一神おく里候年唄と里居士即
 稱さりえ文三年小治政

小西東山 附中平

小西東山ありて遠藤といふ素冠形像の聲は小より父母を
 親族は為る養育せしは乃化る我勤めず只出我後よを
 好む附り中平清く以て我子と名に空教あるべきを

十代修徳の勤いす二三ありて素冠をまて何宗と名する十代
 嘗と号す中禁徳林の翺楚して古今名我は一達人なり
 「元月やはれは野川此水の音興象幽美」三味線も小奇も此
 らは梅若の意精確「む」つていむつては捨はる此を困めり表
 此什は形も及むは「茶」く死ともなはる病う子清玄語此
 川や妙で足ふくはあり「涼」は川橋を川河後平々二乃自
 可稱合作「子嵩ぬれ」怪子ひら川あり嘯山は林園一
 徹兩嶺乘此時是景可想「雨」戸あり秋の姿や灯を担ひ金氣
 録「松」は枝「柳」はつ「た」り乘興自在「初」は川
 何るそふ秋と成みり嘯山いすく以温雅く調寓悲憤と思果
 為傑作「我」ぬれは「何」げく「ア」る「宇」はく「天」津法
 女人形の記すふ杉もも此句有り 深田子の記は此女人形ハ長

尺はくり産して探息ふかす家今亦於十葉嘗て秘す所
 とつふ蓋一西産舊値を此多支を里といへども此奥が奇正
 して右今我綜踏す所が如也及をす要するに西山の一流
 此人出てあり後世了大成をりるるぶる一

前川由平と梅翁のつ子にて東山が山あり歴年親よ入て
 自入と改むを作多くつに一輪や三々此月はく今日の海山燈
 が至らぬ山や雲が界室永中津の玉水燈又双に

仙家奇人談書く上終



